

林光寺だより

真宗大谷派 林光寺広報委員会 発行
〒443-0104 愛知県蒲郡市形原町中屋敷 36
Tel(0533)57-3283 mail: linkou@sk.aitaine.jp



「冬のささやき」 写真:近藤秀男 撮影場所:北海道美瑛町

お釈迦様の時代のインドは、十六の大国による群雄割拠の様相でした。お釈迦様の釈迦族の国は、大国コーサラ国の属国でした。

ある時コーサラ国から、釈迦族の貴族から国王の妃を迎えたいと要求されます。政略結婚です。大臣は、誇り高き釈迦族は他民族と婚姻しないという伝統により、一計を案じ、低い身分の娘を妃に仕立てて送りました。やがてコーサラ国王とその妃との間に生まれた王子がその真相を知り、恨みをいだいて釈迦族の国に攻め入ります。

その時、お釈迦様は、三度その軍隊の前に立ちはだかつて戦を収めました。四度目の侵攻によって釈迦族の力ピラ城は攻め落とされたといいます。「仏の顔も三度まで」という言葉は、ここから来ていると言われています。

今、ウクライナや中東をはじめ、世界各地で戦争が起こり、終息の目途が立たない中、多くの人たちがいのちを奪われています。

先日「日本被団協」にノーベル平和賞が決まったというニュースが流れました。被爆者の方達の長年の活動が認められたことは喜ばしいことです。が、選定の背景には今日の戦争があると思うと、喜んでばかりもいられません。日本にいる私たちも決して対岸の火事と楽観視できないはずです。

お釈迦様は「己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」と教えられ、差別と殺戮の只中にある我々人間を救う道として「往生浄土」を説かれています。

今年も報恩講をお勤めします。親鸞聖人のご命日を縁として、往生浄土の道を問いたずねる大切な仏事です。必ずお参りいただいて、一緒にお話をお聞きいただきますようお願いいたします。

真宗のつとてい法話 六月六日

「自然楽会」の皆さんによる雅楽演奏に

続いてし法話をいただきました。

あらやま じゅん
荒山 淳 師

(元名古屋教区教化センター主幹)

浄土真宗において雅楽は、蓮如上人の時代から法要の中に採用されました。元々は聖徳太子が雅楽器を日本に持ち込み、「三宝供養(仏法僧を敬う)のために利益をもちうべし」という言葉を遺しており、これが真宗の仏事において雅楽を演奏させていただく一番の根拠になっています。

雅楽のハーモニーには微妙な音使いがあります。西洋にはない、例えばドとレのような、同時に出すと近すぎてぶつかり合う不協和音を和音として演奏しています。皆様のご家庭でどのような生活をされているのかわかりませんが、関係が近ければ近いほどぶつかり合うのではないのでしょうか。そのようなことが雅楽の音色の関係において、親鸞聖人のご和讃に「宮商和し

て自然なり」という言葉があります。宮、商とは音階を表す言葉で、隣同士の音です。ぶつかり合うはずのそれらの音が、和音であるということが雅楽の特徴であり、一番近い者同士が本当に和する関係を奏でるということが、私たち人間の生きる課題ではないかということ、音楽を通じて親鸞聖人はご和讃されました。

さて、本日のご讃題である

ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし

とは、親鸞聖人二十九歳の時、法然上人よりお聞きになり、目を覚まされたお言葉であります。それまでの比叡山延暦寺での御修行は、「念仏も」という世界でした。そこでは、朝は題目(南無妙法蓮華經)を唱え、夕には念仏を唱えておられました。しかし、法然上人からお聞きしたのは、「ただ」念仏の教えです。当時、日蓮より「お釈迦様は念仏以外の行も説いているにも拘らず、他の行を全部棄てて念仏のみを選び取る」ということは、お釈迦様の教えを謗っていることになるので無間地獄に堕ちる」とい

う論説を聞いた関東の門弟たちは、京都におられる親鸞聖人のもとを訪ね、往生極楽のみちを聞きに行かれたのです。



今日私たちがここに集まっているのも、どうしたら極楽浄土に往生することができるのかを尋ねたいがためでありましょう。これは、死ぬということではなく、本当に私の生きる方向が見つかったということです。私たちは、生きた分だけ方向性が見つかからないから迷っているのです。何十年と生きてきた中で私たちが課題としてきたのは、量と長さです。あの人よりも多く、長くということにしがみつき、握って離さないのです。それを離させて、生きる方向性を与えてくれるのが念仏のはたらきではないかと私は頂戴しております。

(法話抜粋)

夏の法話会

七月二〇日

うねまき
畝部真紀 師 (豊田市願成寺住職)

「私が僧侶になった理由」というテーマで、お話しさせていただきます。

私は一般の家庭に育ちまして、お仏壇もない家でした。真宗門徒ではなかったのですけど、深いご縁で真宗大谷派のお寺に嫁いで今年で二十八年になりました。

得度式を受けて僧侶になったのが二〇〇一年一月です。当時、上の息子が十一歳、娘が九歳。得度に関して特別な思い入れがあったんです。息子はダウン症という障害をもって生まれてきました。息子が生まれて十一年、何度も途方に暮れたり落ち込んだりしましたが、成長したなと思います。

九年前のお彼岸の前に夫が倒れ、そこから闘病を支える生活になりました。私は、お寺の息子なのに何で仏さんは助けてくれないんだろう、神も仏もないってこういうことじゃないかって思ってたんです。でも、当の本人は「そんな風に怒っても仕方ないよ。怒ったって治らないじゃん。今はできるだけやってみるしかないよ」と、にこにこ笑うんですよ。何でこんななんだろう、何が彼をそんなに強くさせたのかと思いました。

そんな時に、高校時代の友だちの子が病

気だということを知ったんです。主人と同じ頃に発病して、同じような症状でした。友だちはクリスチャンです。電話でお互いのことを話したりすると、娘さんは重い脳症にかかって、自立呼吸が難しく、喉に管を入れて、胃瘻もしているんですね。二十四時間看護で、自宅で在宅医療を受けています。それで少しずつ脳が死んでいくようになっていって、娘さんはいいます。そのくらいひどい状況でも友だちは全然悩まないんですよ。「イエス様が支えてくださる試練なの」と言うんですね。主人を見ていると、その友だちと似てるなあと思ってたんです。

でも、残念ながら主人は闘病の末お浄土に還ってしまったんです。これからお寺を引き継いでいくはずの人が亡くなってしまったので、誰が継ぐかという話になったんです。その時はまだ義父が住職だったんですが、パーキンソンを煩っていたので、本当に喫緊の問題だったんです。

結局私が継ぐことになりました。当時はめずらしい事だったんですね、女性でしょ。ご門徒さんたちどう思われるかなと思ったり、「どれほどホッとしたと思う？」と言っていたことが、私の心の支えです。夫が亡くなりました。翌十七年の四月に同朋大学の別科に入学しました。そこで出会った『真宗入門』という本に「一艘の舟

が航海しています。一人の船員が海に落ちました。誰も気づかずそのまま航行しています。水は冷たく波は荒く真つ暗でした。その人は大海に沈まないように死にもの狂いで足をバタつかせて泳ぐのです。でも、方向もわからず疲れ果て、苦しくあえいでいました。もうこれでおしまいか、体が海の底に引きずり込まれる気がしました。その時、海の深い所から聞こえるのです。力を抜きなさい。力むのをやめなさい。そのままでもいいのです。南無阿弥陀仏。船員はその声のとおり自分の力だけでむやみに泳ぐのをやめ、仰向けになって足を伸ばしました。すると水は温かく感じられ、力まなくとも海が自分を支えてくれるのです。たしかったと喜びますが、本当は初めからずっと大丈夫だったのだということに気がつくのです。そして海を味方にして、海は絶対に自分を見捨てないという確信と共に無事に島にたどり着いたのです。」とあります。海で溺れる船員は私そのものです。自分の力で何とかしようとして力任せに生きています。得度している身ではあるん



ですけど、教えを聞いてまた気づかせていただくということが、私にとつて本当の意味での得度なのかなと考えております。

彼岸会法話

九月二十五日

みうらしんきょう

三浦真教 師 吉良町良興寺住職

彼岸の元の言葉はパラミターという。訳は到彼岸、彼岸に到る。私たちのこの世は

此岸^{しがん}。彼岸というのはお釈迦さまの悟りの世界。私たちの今暮らしている処は、悩み苦しみが絶えない、辛抱しなきゃならないから忍土と言われます。

彼岸に到るための大事な修行、行とは六波羅蜜と言つて、六つ説かれていゝんです。最初は「布施」。お釈迦さんは布施の行を一番最初に説いていゝんですね。「持戒」、

戒めを守ること。そして「忍辱^{にんにく}」、いやなこと耐^にずかしいことに耐えろということ。

それから「精進」、これは絶え間なく努力

する。それから、「禅定^{ぜんじょう}」。これは心を静

めて一つのことに集中する。私たちは気が散つてしまつて集中できない。気持ちがいライラしていると人の意見は聞けませぬね。だから、ものごとをありのまま自分の心を

無にして事実になんと向き合いなさいよと。これが禅定ということ。そういう状態だとはじめて周りが見えてきて「智慧」が湧いてくる。

「布施」ということですが、今年、私の寺で鐘樓を建てるということになって、鐘樓の工事をやつてゐるんです。大変難しい時代だけど、皆さん概ね協力してもらえて、しようということ。寄進のお願いをしまして、非常に考えさせられたこともあります。同級生もいまして、「今まで無くて済んできたのに、どうして（鐘樓が）いゝんだ」という意見もあるし、「正直言つと住職の見栄じゃないか」というのもあるんですね。そう言われると、違いますとまではちよつと言えないんですね。

お釈迦さまが「無材の七施」ということをお説きになつていゝんです。まず優しい目つき（眼施）。それから和顔、につこりした顔（和顔施）。それから優しい言葉がけ（言辞施^{げんじせ}）。

それから体を使つて（身施）、困つていたり具合が悪そうなお人をおられたら、近づいて「どう



かされましたか」と心を施す（心施）。それから席を譲る（床座施）と。それから昔のことですので、どうぞ今晚ここに泊まつてくださいと宿を貸す（房舎施）。これらはお金をかけず、財物を損せずして果報がいただけるものですと、無財の七施。

それから施しには、法施と財施と無畏施があります。法施というのは教え。それから財施というのはお金。それから無畏施というのは、生活不安。このままでは生活できない（不活畏）。自分の評判が落ちる、自分の悪い評判が広まるんじゃないかという畏れ（悪名畏）。それから自分が悪いことをすることへのおそれ（悪趣畏）。それから、大勢の目に畏れを感じる（大衆威徳畏）。死の畏れというのもあつて（命終畏）。私たちの心はいろんなものにかき乱される。人生は仕事もきりがな、欲もきりがないので、どう生きるか。それでお釈迦様は、「布施」ということを言われる。本当の施しは三輪清浄の布施と言われます。俺が、何を、誰にこれが三輪です。そのとらわれがあると、本当の施しとは言えませぬ。布施の功德は、した人がいただくんです。六波羅蜜ということはいきなりやるということは難しいかと思ひますが、普段の生活で少しでもそういう努力はしないといけないなと思ひます。

（法話から抄出）

インタビュ―

おんどうぼう

(10)

今回の御同朋は、林光寺の総代、岡田屋さんの岡田福一朗さんです。菓子店の歴史と今の思いについてお聞きしました。

おかだ ふくいちろう
岡田 福一朗さん (西浦町北馬相)

Q この岡田屋さんはいつからなんですか？

岡田 この店は昭和五十年に店を始めて、その前は自宅の方に工場があった。そこで作って小売りの八百屋さんとかお菓子屋さんとかに卸してた。形原も辻から下市、音羽、あの辺の店に何軒も回った。天神橋のバス停の前から林光寺の前にも店があって、おやじが作ったのをワシが中学3年の頃から自転車で配達に行ってた。

Q 元々はお父さんが始められたんですか？

岡田 おやじは関東大震災の頃に東京でパンの修行をしようとね。それからしばらくしてこっちへ帰って来てね。それから、おやじは名古屋の三菱重工に勤めたんだ。幼稚園の頃に名古屋に引っ越したけど、小学校に入って戦争が激しくなって来たんでこっちに戻ってきた。おやじは、空襲の無残な現場を見てきたって話してくれたわ。

それから、初めは形原でとらやさんとか、何人かで西宝組合というのを作って、そこで作って売ったんだわ。その頃は配給でね。それからおじさんの勧めもあって、独立して自分の店を始めた。

Q 福一朗さんは、お父さんに習われたんですか？

岡田 うん、おやじに習ってね。元はパンを作ってた。そのうちに、シ

キマパンとかいくつか大手のパンが入ってきてね、これじゃいかなというところで、ワシが勘考してパンの生地を蒸して、お酒を入れたりして酒まんじゅうを作ったら、これがよく売れた。三ヶ根さんの口ープウェイの売店でふかして売ってくれたりしてね。それから和菓子に切り替えたんだわ。昔は大きなまんじゅうもよく作ったがね。

今でも「懐かしい、昔のこと思い出すなあ」と言って、遠くからわざわざ酒まんじゅうを買いに来てくれる人があるよ。

Q 七月に奥さんが亡くなってお店をどうされるか心配してました。

岡田 この通りもずっと商店街だったけど、変わっちゃってねえ。食品安全許可証が来年二月に切れるんだけど、息子がまだやればいいと言ってくれるし。土日は手伝ってくれるんでね。「いつから店やるだ」って言うってくれる人もあるしね。やれる範囲でやるしかないんでね。

個人商店が少なくなる中、岡田さんは頑張っておいしいお菓子を作っておられます。これからもお彼岸のお餅お願いします。



仏教あれこれ

10 聖徳太子（厩戸王）読み方はいろいろあります。うまやとおう、うまやどのおう、うまやどおう） その1

前回紹介したように最近の教科書では“厩戸王”（『日本書紀』に記される名前は厩戸豊聡耳皇子）と表記されることが多いですが、ほとんどの読者の方にはなじみないので“聖徳太子”と表現していきます。聖徳太子の事績については『日本書紀』から列挙することができますが、どこまでが本当のことであるかはよくわかっていません。年表形式でまとめてみます。（“天皇”という称号もまだこの時期にはありません。便宜上使用します。）

西暦年	事績
574	皇子（後の用明天皇）皇女の子として生まれる 両親の父親はいずれも欽明天皇、両親の母方の父（祖父）はいずれも蘇我稲目
587	仏教の受容を巡り崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋とが武力衝突 聖徳太子は蘇我氏の側につく。軍事氏族である物部氏の兵は精強で、蘇我軍は三度撃退された。これを見た厩戸王は、木造の四天王像をつくり戦勝を祈願、勝利すれば仏塔をつくり仏法の弘通に努める、と誓った。
592	蘇我馬子が崇峻天皇の暗殺を指示
593	推古天皇即位。摂津国難波に四天王寺を建立 この時、太子は皇太子（天皇と同様皇太子の尊称も当時はまだない）として馬子とともに天皇を補佐
594	仏教興隆の詔
600	遣隋使派遣 『日本書紀』には記録がないが、607年の遣隋使に先立って実施された。あまりの文化程度の違いに衝撃を受け、このあと様々な改革が行われた
603	冠位十二階制定 いままでの世襲的な官吏登用から、実力による官吏組織を作る
604	十七条憲法制定 豪族たちに臣下としての心構えを示し、天皇に従い、仏法を敬うことを強調する
607	小野妹子を大使として遣隋使派遣、翌年答礼使として裴世清が来日
615	この年までに太子が『法華義疏』、『勝鬘經義疏』、『維摩經義疏』を著述 あわせて「三経義疏」と呼ばれ、日本人の手による最初の本格的な注釈書といわれるが、『法華義疏』のみが現存。太子が深く仏教を理解していたと言われるゆえん
620	厩戸皇子は馬子と議して『国記』『天皇記』『臣連伴造国造百八十部并公民等本記』を編纂
622	2月22日 薨去

形原町 鈴木祥司

【本の紹介】

『シニガミさん』 宮西達也 作・絵 えほんの杜

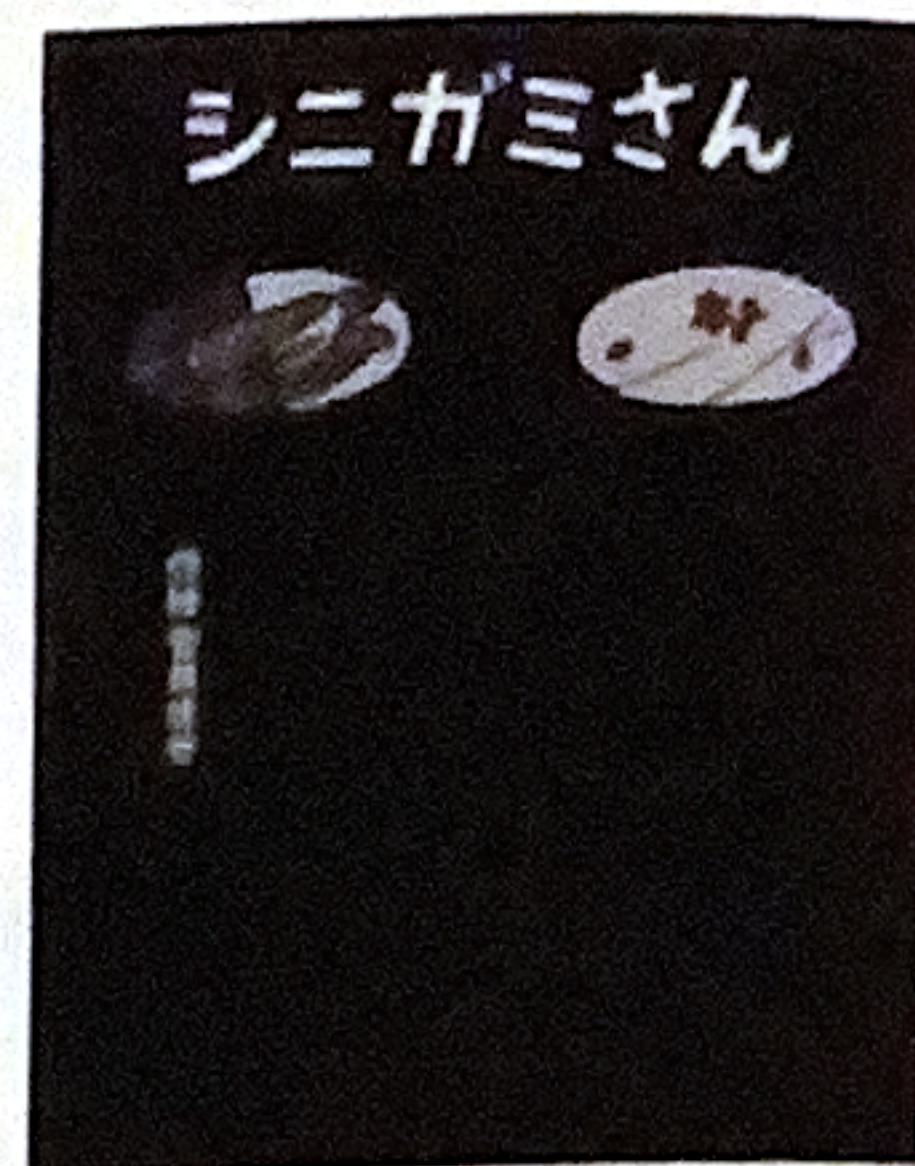
「だれでも、じぶんが 生まれた日 たんじょう日は しっています。
でも、じぶんが 死ぬ日を しっているひとは だれもいません。
それがわかるのは、その日を きめるのは わたくし シニガミでございます」

シニガミのそばには、あと何日かで死んでしまうコブタが たおれていました。
そこへ はらぺこオオカミがやってきました。

オオカミは いっしょうけんめい コブタのかんぴょうをしました。
でも、コブタのぴょうきは ぜんぜんよくなりません。

あきらめそうになるコブタに オオカミは、言いました。
「な、なんで あきらめるんだ！」

さて、二人は、このあとどうなったのでしょうか。



小学校で教員をさせていただいていた頃、いつも思っていたことがあります。

「がんばっていない子はいない」

「やればできるよ」

「子どもたちの応援団になりたい」

生きて行くことは、本当に大変なこと。みんな、今、がんばって生きている。

そして、きっと、そばには 自分の事を思っていてくれる人がいる。

(形原町 鈴木 真理)

Column

うちしき
打敷

お内仏(お仏壇)の刺繍のほどこされた三角の布地を「打敷」(うちしき)と言います。

打敷を掛けて飾るのには意味があります。それは、お釈迦さまが三十五歳の時に悟りを開かれたと言われますが、それから八十歳で亡くなるまで、各地で説法をされました。その時にお供のお弟子さんが、お釈迦さまに直に座っていただくのは忍びないと、身につけていた衣を脱いで下に敷き、その上にお釈迦さまに座っていただいていた。その敷いた衣が、打敷なのだと言います。

そこから、打敷は常に掛けっぱなしにはしないで、お釈迦さまの説法であるお経が読まれる時に掛けて、お参ります。具体的には、お正月(修正会)、春秋のお彼岸、お盆、報恩講の年中行事、それから、誰かの年忌法要の時にはきれいな打敷を掛けます。

また、お葬式が終わって四十九日までの間は、白い打敷をかけるようにします。白はその期間だけです。

夏用と冬用というのは明確な決まりはありませんが、夏用は紹や紗の涼しそうな生地物が使われます。夏冬の使い分けの時期は、人間の衣替えの時期で良いと思います。

打敷は、うわしよく まえしよく上卓と前卓(上下の台)の板を外して、

打敷を掛けて、板で押さえ、鶴亀・香炉・華瓶などの仏具を乗せます。大きなお内仏は、両脇にも掛けることがあります。疑問があれば寺までお尋ねください。

